

私の読んだ卒業論文

△卒業論の傾向▽——上代

橋本 達雄

万葉集を卒業論文に選んだ人はこの四年間に四六人を数える。題目と筆者の名を眺めているといろんなことが思い出され、折々に見せたしぐさや表情などまでその内容とともに浮かんでくる。しかしそんな思い出は今はおこう。もう少し事務的なこと、感じたことをまとめて、これからの参考に幾分なりとも供したいと思う。

四六篇の題目を見てみると、各方面から多彩なテーマが取りあげられているが、やはり作家論が一番多く、東歌や防人をこれに加えると二五篇もあった。次に相聞・挽歌の各三篇が目立ち、ほかに植物・色彩・夢など女性的なもの、修辞・思想・自然・歌風・歌体・万葉仮名など本格的なものもある。作家で人気の集中しているのは、徳良・額田王・東歌で各四、家持の三篇がこれに次いでいる。作家論の傾向として、大別するとよいものと悪いものがかなりはっきりしているように思う。それはおそらく、その作家に打込んで、是が非でもと情熱をもやした人と、比較的安易に何とかまとまるだろうと甘く考えた人との気構えの相違に基づくのであろう。作家論は

形をつけるのにやさしそんで、一步踏みこんだ場合には、なかなか自己の見解を述べるところまでには至らないと思う。作家と自分が問われるのである。歌数の極端に少ない作家、反対にきわめて多い作家は別の意味で抑え方がむづかしく、比較的好篇に乏しい。また万葉中の高峰、人麻呂に正面から挑んだ論はまだ出ていない。後輩の精進が期待される。

全体として見ると、大きな和歌史の流れとか展開を問題として、あるいは念頭におきつつ扱ったもの、したがって枚数も一二〇〜一五〇程度を費したものに好論が多い。卒業論文の段階では枚数の多い人がやはり意欲的だと一応言えるようである。テーマを選ぶ前に、ともかく全体を通読してほしい。これは三年生のゼミのはじめにいつも私の言ってきたことである。これを真面目に実行した人に好論の多いことは間違いない事実である。水準に達するものを書けるか書けないかは、こんなもつとも基本的なところにあるといつてよい。昔の方がよかったなど言うつもりはないが、何か年々、書きさえすれば何とかしてくるだろうというようなノンビリムードが拡がってきているようにも感じる。卒業生に尋ねると、ほとんど例外なく、卒業論文を書いてはじめて勉強した気になったと言う。一生のうちにまとめて一〇〇枚前後の原稿用紙を埋めることは、ほとんどの人にとって最初で最後であるにちがいない。機会を大切にし、やったという満足感をもって卒業してゆきたいものである。